

G・ファン＝フローテン著
『ホラーサーンにおけるアッバース朝の勃興』訳 (1)

高野 太輔 (大東文化大学国際関係学部)

**De Japanse vertaling van *DE OPKOMST DER
ABBASIDEN IN CHORASAN*
door G. van Vloten (1)**

KONO Taisuke

訳者序文

本稿は、1890年にライデンのE.J. Brill社から出版されたオランダの東洋学者ファン＝フローテン(1866-1903年)の著作『ホラーサーンにおけるアッバース朝の勃興』(G. van Vloten, *De opkomst der Abbasiden in Chorasán*, Leiden, 1890)の全訳である。すでに学問的な使命を終えたと評されて久しい本書であるが、(1)オランダ語であるために原文を通読した者が少ないこと、(2)公刊から130年以上の歳月が過ぎて本書そのものが歴史学的史料としての価値を持つようになったことなどの理由から、日本語訳を世に問うことにした。訳者はオランダ語の専門家ではないため、拙い部分も数多くあると思われるが、読者諸賢の批判と訂正を期待する次第である。

訳文中、()は原文にある括弧を、[]は訳者による補足を意味している。また、必要に応じてオランダ語の原語を括弧なしで記した。強調のためのイタリック体は傍点に置き換えてある。各頁に入っていた脚註は最終回に文末註としてまとめるものとし、訳者による解説や註記を脚註として示した。また、原著の頁番号は[]の中に算用数字で示した。

[1]

序論

ウマイヤ朝の覇権がアッバース朝に移ったとき、あるウマイヤ家の有力者はその原因を問われて、こう答えた。「我々は、臣民のために割くべき時間を娯楽のために費やしたので、彼らから愛想を尽かされてしまった。人々を重税で苦しめたので、財庫は空っぽとなり、農地も荒廃してしまった。自由裁量権を与えてやった部下たちは、我々の知らないところで利己的な目的のためにそれを濫用

していた。給料が滞っていたので軍隊に頼ることもできず、いざ戦うとなると敵に利用されてしまい、誰にも助けてもらえなかった。しかし、何よりも帝国内で何が起きているのかを知らなかったことが、没落の要因の一つであったことは間違いない。」⁽¹⁾

この言葉には、多くの真実が含まれている。ウマイヤ朝カリフの大半は享樂的な生活を送り、苛酷で貪欲な部下に臣民の統治を任せ、民衆から疎まれていた。その無神経さが、彼らの没落に少なからず影響したことは間違いない⁽²⁾。[2] しかし、東洋の人々はここに挙げたような権力の濫用に対して、常にある程度の柔軟性と忍耐力を持っていたので、王朝が没落した原因は本当にそれだけなのだろうかという疑問が生じる。

答は、ウマイヤ家の有力者が語った言葉の最後の部分にある。統治者の注意を引くことなく、人々の心の中で発酵し、沸騰していたもの、人々が熱狂していた思想、狡猾な扇動者によるそれらの利用などについても、考慮に入れるべきなのである。

しかし、事の性質上、それは歴史家にとってすべての詳細を知ることが最も難しい要素である。というのも、私たちが情報源としている文献の作者たちの時代には、没落した王朝の専制政治をできるだけ辛辣に描くことが安全かつ有利である一方、民衆の気持ちを都合良く操作して利用することで幸運を掴んだ新しい支配者にとっては、そうした下劣なやり方が掘り返されるのは決して喜ばしいことではなかったからである。そもそも、そうした情報が得られるのは新王朝の揺るぎない支持者たちからだけであり、彼らはその栄達の性質上、主君が喜ぶような話しか記録させようとはしなかった。

また、民衆の思想についても、アラブの歴史書が年代記の形式をとっていることが主な原因となって[3]、研究上の困難が生じている。それ以外の点では非常に優れた作品であるとはいえ、これらの著作は事実を時系列に沿って並べる体裁になっているため、私たちはその思想が持った力について、事実として顕われたことだけを受け取るしかなく、時には遠回しに、時には非常に詳しく、しかし大抵は何の記述も無いという具合に、いつも断片的にしか情報を与えてもらえないのである。

これらの障害にもかかわらず、アッバース家の勃興に関する数々の伝承は、特にタバリーの歴史書の出版という重大な出来事の後では、完全には無理としても、そこから首尾一貫した叙述を導き出そうとする試みを正当化するのに十分なほど重要なものである。しかし、読者は以後の頁で、多くの仮説や疑問点に遭遇することを覚悟しなければならない。著者の力が不足しているのでなければ、それらに確かな答を与えるには新たな情報源の出現を待つしかなく、それが出てこなければ永遠に謎のままということもありうるのである。

ムハンマドの一族であるハーシム家は、歴史家がいくら事実を隠そうとしても、メッカで最も大きな家系でもなければ、最も影響力のある家系でもなかった。預言者が宣教を始めた最初の数年間

¹ タバリーの年代記『預言者たちと諸王の歴史』がファン＝フローテンの師にあたるド＝フュー（1836～1909年）によって出版されたのは1879～1901年、本書の出版は1890年である。

に僅かな賛同者しか得られなかったという事実は、少なからずこの状況に起因していたことは間違いない。しかし、メッカが征服され、異教徒の貴族たち aristocraten が新宗教に服従し、イスラム教の開祖 stichter の思想が勝利すると、ハーシム家もまた輝きに包まれるようになった。[4]

イスラムの初期において、預言者の一族に対する尊敬の念は、宗教的な性質を帯びていた。人々は、彼らの中に亡くなった神の使徒の記憶を見出した。彼らの口から語られる伝承は明白に価値が高く、その知識をもとに宗教的な諸問題に対して決定を下すことができたからこそ、彼らは敬意を払われていた。もし彼らが、信者たちにとって預言者に代わる者は誰かと問われたとき、自分たちの中にしか適任者がいないと考えていたとしたら、ムスリム教団における彼らの権威と、彼らに対する敬意の性質について誤解していたことになる。教団が擁立したのは、預言者の忠実な支持者かつ、その教えの熱心な擁護者でもあったハーシム家の候補人アリーではなく、家系は違うものの劣らぬ資質を備えたアブー・バクルとウマルという、ムハンマドの盟友の方であった。

最古の信者たちは、自分たちの教導者 voorgangers を選ぶ際に、預言者との血縁関係を付度したわけではないことは明らかである。全体的に見て、最初の二人のカリフの支配下で矢継ぎ早に起こった出来事に対するハーシム家の影響力は、非常に小さかった。歴史家の中には、征服した地域や征服する予定の地域に派遣された軍司令官や役人の中に預言者の一家 het huis van den profheet の者が全く含まれておらず、それどころか、常にムハンマドの手強い敵であった者の息子たちが重要な役職につけられていたと指摘する者もある。その理由は、すでに述べたように、後者の中には [5]、マフズーム家やウマイヤ家など、イスラム以前からすでに政治的にも軍事的にも力を持っていた一族の出身で、より優れた能力を持つ人物がおり、彼らと友好的にしておくこともまた重要だったからである。

こうした点に関しては、預言者自身がすでに手本を示していたにもかかわらず、ハーシム家の人々は自分たちの高い評価にそぐわないこのような扱いをあまり快く思っていなかったようだ。アリーがウマルと不仲であったことはよく知られている。彼が最初の二人のカリフと協調することを一切拒絶したのは、両名がアリーに家族に信頼を示さなかったからだとも考えられるが、結果として、ウマルの後継者にはウスマーンが任命され、アリーはカリフの座を手に入れそこなう結果となった。

第三代カリフの失政のおかげで、ハーシム家はようやく目的を達成することができた。ウスマーンは前任者以上に、自分が属するウマイヤ家を優遇した。その露骨な依怙最賈に対して反乱が巻き起こったとき、アリーは危地のカリフを救うための努力をほとんどしなかった。アリーとその仲間だけではなく、ムハンマドの最も忠実な支持者の中にもウスマーンの殺害を無為に見守っていた人々がいたとはいえ、預言者の一家は事態が痛ましい方向に進むことを喜色満面で眺めていた。それは彼らの野心に満ちた期待をかなえるものでしかなかったからである。ウスマーンの兄弟ⁱⁱであるワリード・イブン・ウクバの詩句は綴っている。

ハーシム家よ、我らの関係は石のようなもので、

ⁱⁱ 両者はアブド・シャムス家のアルワー・ピント・クライズから生まれた同母兄弟。

いちど割れてしまうと元には戻らない。

ハーシム家よ、汝がアルワールの息子（ウスマーン）の剣と槍を横取りするなら、
我らは平和に暮らせるわけがない。[6]

ハーシム家よ、汝の姉妹の子ⁱⁱⁱの武器を返してくれ、
汝にはこの戦利品を正当に所有することができない。
かつてホスローがマルズバーンに裏切られたように、
汝は自分の地位を得るために彼を裏切ったのだ。⁽³⁾

預言者の一家は、アリーの勝利による恩恵をほとんど受けなかったようだ。彼はカリフの座を手に入れたものの、ウスマーンを殺害した者たちから表敬を受けたことでその統治に非合法の烙印が押され、敵対者や妬みを持つ者たちが彼の資格に異を唱える余地を与えてしまった。アブー・バクルやウマルの精神に支えられ、世俗的な利益を追求しない敬虔なイスラム教徒にとって、どちらの側につくかは難しい問題であったし、全員がどちらかについたわけでもなかった。いちばん賞賛に値する点が多い人物はアリーであったとはいえ、ムハンマドの最も忠実な盟友の一人であったサアド・イブン・アビー・ワッカーズのような人物が、彼への表敬を拒否したことは重要である。

アリーは二つの敵対的な人々を相手にしなければならなかった。その一つは、アリーが即位したせいで失ったものを、ウスマーンの死を利用して取り返そうとした者たちで^{iv}、彼を見殺しにした責任はハーシム家だけでなく彼ら自身にもあったはずだが、暴動を正当化するために「ウスマーンの復讐」をスローガンに掲げていた。彼らは大した勢力では無く、真っ先に敗北を喫した。二番目の敵対者で、シリアにいたウマイヤ家のムアーウィヤの立場は、もっと強かった。その地では、「ウスマーンの復讐」という叫びが現実の意味を持っていた。ウスマーン一族は長くシリアに滞在しており、戦力だけでなく、部隊の心をも掴んでいたからである。総督と同じく表向きだけイスラム教に改宗していたアラブのベドウィンたちは [7]、復讐の呼びかけに喜んで耳を傾けた。アリーの軍隊の下では、シリア人^vのような団結力が欠けていたことが、すぐに明らかになる。いざ戦うとなると、彼らは十分に勇敢だったが、シリア人が計算づくで自分たちの都合のためにコーランに決定権を委ねようとする^{vi}、ただちにアリー陣営の一部が身を翻し、すでにほぼ確実にしていた勝利を犠牲にして、啓示の裁決に基づく新カリフの決定を選んだ。こうしてアリーが停戦に追い込まれると、その和平協議が彼にとって新たな悩みの種を生み出すことになった。彼が二人の人間に裁断を仰いだことで、自分の正統性が人間に判断できる問題に過ぎないと考えていることを露呈してしまったのである。彼のカリフ位が正統なものであり、信徒社会の合意に基づいていると考えて

ⁱⁱⁱ アルワールの母はハーシム家のウンム・ハキームで、預言者ムハンマドの父アブドッラーやアリーの父アブー・ターリブの姉妹にあたる。

^{iv} 第一次内乱の初期に反旗を翻したタイム家のタルハ、アサド家のズバイル、預言者の妻のひとりアーイシャのことを指す。

^v ここで言うシリア人とは、シリア方面軍のアラブ＝ムスリムを指す。

^{vi} スイッフィーン^{vii}の戦いが膠着状態に陥ったとき、シリア軍が槍先にコーランの紙片を結びつけて掲げ、「神による裁決に任せよう」と呼びかけたことを指す。

いた信者たちの一部は、彼を否認する側に回った。彼らは最終的に一切の交渉を拒否し、「アッラーによらずして裁決なし」というスローガンを掲げて、いわゆるハワーリジュ派の基礎を築いたのである。

こうした出来事の影響を受けて、アリーのカリフ位は異なる様相を呈するようになった。ハワーリジュ派が離脱してからは、個人的な理由で彼を支持しない人はかなり減ったと考えてよいだろう。イブン・アル＝アスィールによると、ハワーリジュ派が離脱した後、アリーの支持者たちが彼のところに来て、「我々はあなたの友人の友人であり、あなたの敵の敵である」と言って、再び彼に敬意を表したという。このような無条件の支持は、アラブ人が自分たちのシャイフに与える以上のものであり、その言い回しは [8]、過去にアブー・バクルとウマルが信者たちから受けた敬意を示す握手を超えるものであった。アリーもそれを肌で感じていたのか、服従を受ける条件として、コーランと預言者のスンナに従って行動することを自らに課している⁽⁴⁾。しかし、これ以降、彼の権威はムスリム全体のものではなく、シリア人がムアーウィヤのシーアであったように、アリーのシーアという党派のものとなった^{vii}。

そのため、このシーアという言葉は当初、まず第一に政治的な意味合いを持つものであった。つまり、シーア派 *shī'at* とは、国家の最高権力をアリーに与えてほしいと願う者のことであり、それを望む根拠については意識していない者のことであった。それがより宗教的になったのは、アリーの支配を望む政治的な欲求と、支配者を神の化身とみなすようなイスラム教とは無縁の概念が、一部の人々の間で結びついたときである。アリーはすでに、自分の人格を過剰に崇拜する人々に悩まされており、決してそれを煽ったりはせず、厳罰をもってその過ちを正そうとしていたが、彼らを突き動かす精神性は揺らぐことが無かった。イスラム教に改宗したのは主にペルシャ人で、支配者に対する個人崇拜を最優先にしていた。よく指摘されることだが、アラブ人にとっての権威が常に目下の者との暗黙の了解に基づくものであるのに対し、ペルシャ人は信徒の合意に基づく権力というものについて、ほとんど理解していなかった。[9] その一方で彼らは、神の一部が預言者の一家から出た教導者すなわちイマームに乗り移ったのであり、彼に服従することが何にも増して信者に課せられた義務であると、ただちに考えるようになった。こうした主張を説いたシーア派のカイサーンもまた非アラブ系で、多数のペルシャ人が初めて参加したムフタールの反乱で活躍している⁽⁵⁾。このカイサーンのような極端な人物の教えがどこまで一般の人々に聞き入れられたのかは、もはや確かめようがない。ただ、彼らがアラブ人の社会でどうにか受け入れられたとか、最終的に受け入れられたというようなことは、ヒジュラ 1 世紀には考えられそうにない。

ところが、アリーの死後にムアーウィヤが難なく巨大なカリフ帝国を継承すると、アラブ＝ムスリムの間でも、預言者の一家に対する愛着が新たな活気を得ることになった。確かに、アブー・バクルやウマルの良き時代は過ぎ去り、その再来を望むことはできなかつたし、ウスマーンの統治や

^{vii} シーア *shī'ah* という言葉は後に「アリーの党派 *shī'at 'Alī*」すなわちシーア派と同義になるが、本書ではアッバース家運動を含めて「同じ政治目的のために結束した党派 *partij*」という本来の意味で用いている。

アリーへの任命には多くの根拠のある批判が浴びせられてはいた。だが、預言者の代わりとしてダマスカスに王朝が設立され、しかもその創始者は相手の弱点につけ込み、ずる賢く立ち回ることでもんまとカリフの座に登りつめたというような不正行為の前では、そうした批判など些細なことに過ぎなかった。ムアーウィヤとその親族は、イスラム教の開祖に対する貢献や敬虔な振る舞いを喧伝しても信者たちの支持を得ることはできず、ウスマーンを死に至らしめたほどの彼の一族への憎しみは人々の心から全く消えなかったのである。[10]

この王朝が忌み嫌われた結果として、預言者の一家への期待が高まるのは当然であり、ウマイヤ家が金曜日の礼拝時に説教壇から公然とアリーを呪うという浅はかな措置を実施しても、それを低減することはできなかった。ある実直なムスリムは言っている。「おお、我が息子よ。この世界には天が破壊できぬものを築くことなどできない。だが、大義のために築かれたものは、世俗的な欲望によって破壊されることはないのだ。アリーを見よ。神かけて、奴らは彼を公然と呪詛することで、その髪の毛を掴んで天国へと持ち上げているようなものだ。」⁽⁶⁾

ダマスカスの宮廷が、すべての敬虔な人々、あるいはそのように見られたい人々からすぐさま不信心の匂いを嗅ぎ取られた一方で、慈善事業に専念するアリーの息子たちが献身的な生活を送っていた聖地メディナの方は、多くの人々の熱い視線を浴びるようになっていった。預言者を知り、預言者と共に過ごした者が少なくなるにつれ、彼の子孫は信者たちにとって、次第に理想化されていくイスラムの最も古い時代を象徴する存在となった。つまり、預言者を知っているという強みから発言権を持っていた者が消えたいま、預言者の血を引く者の発言こそが傾聴されるようになったのである。

この期待は、アリー家を傷つける結果にしかならなかった。彼らは、自分たちに有利な多くの動きを一定の目標に向けて導く洞察力を持たず、流されるままに漂い、その流れが自分たちをどこに連れて行くのか、正しく計算できなかったのである。[11]

彼らが次々と平穏な生活を捨てて宿命的な死を迎える様子には、素朴なヒロイズムを感じずにはいられない。ザイド・イブン・アリーは、クーファに向かったときに叫んだ。

危ないからよせと彼女は言った、私をひるませるつもりで
 まるで運命の変転から自分を守ることができるかのように。
 けれども、私は言った。死とは湧き出る泉のようなもの
 いつかその水で自分の杯を満たさねばならぬと。
 運命が模範となるなら、
 私は苦難に分け入って行く模範となりたい。
 だから、私のことは放っておけ。たとえ命を永らえたとしても、
 どのみち私は死なねばならぬのだ。⁽⁷⁾

アリーの子孫たちが、軽率な行動を取ったり、漫然と過ごしたりして機会を逃した一方で、ハーシム家の別の家系の中には、全く逆の資質で幸運を掴んだ人々がいた。ムハンマドの叔父、アッパースの子孫たちである。アッパース本人は、ムハンマドの説法を常に怪訝な面持ちで見ていたし、伝承がどんなに美しく脚色しようとも、非常に長い間、メッカの異教徒たちの言いなりになっていた。

メッカで預言者の力が高まり、勝ち誇ったムハンマドが町に入ろうとして漸く、昇る朝日に敬意を払うことが得策と考え、忠実に自分の甥を補佐することにしたのである。ムハンマドの死後、ハーシム家の長として、彼には幾分の野心があったのかもしれないが [12]、賢明な策略家としてそれを内に秘め、むしろ甥のアリーこそが信徒の教導者として相応しいと考える人々に加わることにした。預言者のために財産や血を犠牲にして来なかったせいで、当時まだ主導権を握っていた大多数の信者の間で高い地位を得られていないことが明白だったからである。

預言者の唯一生き残った叔父であり、その家系の中では最年長であった彼は、初期のカリフたちの下で、その死 (32年または34年) まで大きな名誉を享受しており、世俗的な財産も侵害されることはなかった。息子のアブドッラーは、コーランや預言者の言葉について深い知識を持っていたため、敬虔な人々の間でさらに尊敬を集めており、アリーのカリフ時代にはバスラの統治を任されていた。しかし彼は、アリーがその支援を最も必要としていた時期に地位を捨てて、国庫にあった600万ディルハムを持ち出し、メディナへ逃げてしまった。⁽⁸⁾

ムアーウィヤが実権を掌握すると、一家はできる限り新しい支配者と和解しようとした。アブドッラーの兄弟であるウバイドッラーは、アリーの息子ハサンに仕えながら、既にそのための手段を講じていた。彼が提出した服従の条件は [13]、自分の財産を奪われないことであった⁽¹⁰⁾。もちろん、抜け目のないムアーウィヤは自分に寄せられた友愛の情を喜んで受け入れた。アブドッラーは、アリーの息子フサインやアブドッラー・イブン・ズバイルとは異なり、ムアーウィヤの息子ヤズィードに敬意を表していたようである⁽¹¹⁾。アッバース家の子孫たちは、賢明にもフサインの反乱には介入しなかった。その後、アブドッラー・イブン・ズバイルがメディナで反ウマイヤ家運動の先頭に立ったときも、アブドッラー・イブン・アッバースは他のすべてのハーシム家の者と同様に、この僭称者に敬意を表することを拒否した。ヤズィードは、そのことを彼に深く感謝していた⁽¹²⁾。

68年、アブドッラー・イブン・アッバースはメッカ近郊のターイフで死去した。彼が亡くなった時、帝国は極めて悲惨な状況に陥っていた。イラクでは、ムフタルの反乱がおびただしい血の犠牲を払って鎮圧されていたが、次のカリフを決める戦いの帰趨はまだ明らかではなかった。アブドッラーは、シーア派が預言者の一家に固執していること、ムフタルのような巧みな指導者であればそれを利用できること、アリーの子孫は運動の指揮権を取れない、あるいは取ろうとしないことなどを、目の当たりにしていた。さらに、アブドッラー・イブン・ズバイルには人望がなく、彼が優れているからというよりも、むしろ邪悪なシリア人が憎いからという理由で人々が彼を支持していることにも、気付いていないわけではなかった。[14] 自分の子孫がこの地に秩序を築くために召し出されるかもしれないという考えが、彼の頭に浮かばなかったと言えるだろうか？

アリーの長男であるハサンが亡くなった時点で、すでにムアーウィヤはアブドッラー・イブン・アッバースに「いまや汝こそが汝の一族の長である」と言っていたらしい。だが、彼の答は「フサインが活着している限りそうではない」というものであった⁽¹³⁾。カルバラの戦場でフサインは命を落とし、アリーの息子と孫が十一人、兄ジャアファルの孫が二人、弟アキールの孫も五人が亡く

なった。母親の名前をとってイブン・アル＝ハナフィーヤと呼ばれているアリーの息子ムハンマドは生き残り、いまや預言者の一家の権利の主張の担い手となった。少なくともその名の通り注目すべき人物であったムフタルは^{viii}、二人の対抗カリフであるアブド・アル＝マリクやアブドッラー・イブン・ズバイルと争った。68年の大巡礼の際、アラファートの平原に翻った四つの異なる旗は帝国の分裂を象徴するものであったが、その中にはムハンマド・イブン・アル＝ハナフィーヤの旗もあり、彼が誰かを自分より上であるとは認めていないことを示していた。もっとも、ムハンマドは世俗的な支配権に興味の無い人物であり、少なくとも自分から物事を仕切ろうとはしなかったし、彼がムフタルに与えた励ましも精神的な支えと呼ぶには程遠いものであった。

アブドッラー・イブン・アッバースの死から約十年後に彼も亡くなり⁽¹⁴⁾、その死によってシーア派の関心は再びアリーの子孫全員に [15]、特にハサンとフサインの子孫に分割された。以前ならばともかく、いまやアブドッラー・イブン・アッバースの息子たちは、アリーの子孫と同様に、自分たちにもカリフとなる権利があることを思い起こさずにはいられなかった。[預言者]ムハンマドが亡くなったとき、アッバースはその最年長の近親者であり、娘のファティマやその子孫と同じくらい、預言者の遺産を受け継ぐ権利を持っていたのではないだろうか？

すでにそれ以前から、ムハンマドの後継者は誰なのかという問題が取り沙汰されることはあった。かつて、サイード・イブン・アル＝アースが奴隷のアブー・ラーフィウを一部だけ解放し、残りの部分を預言者が買い取って完全に解放したという出来事があったのであるが、伝えられているところによると、アブー・ラーフィウの息子ウバイドッラーは、ハサン・イブン・アリーのもとを訪れた際、自分が彼の被護者 client であると発言したという。これに対して、タンマーム・イブン・アッバースの被護者の一人は、次のように詠った。

もし汝がアッバースの息子たちに父祖の権利を認めないなら、

それは随分と恩知らずなことだ。

いつから娘の子供が遺産を要求し、

血筋の上の父祖を名乗るようになったのか。⁽¹⁵⁾

つまり、ムハンマドの死後、アリーではなくアッバースがアブー・ラーフィウの保護者 *patroon* となったのであり [16]、アッバースの正当な相続人の被護者であるとウバイドッラーが表明しなかったことは、父親の保護者に対して不義理ではないかというのである。このように、アリー家が預言者の娘から引いた血筋を権利の根拠としていたのに対し、アッバース家はアッバースこそが預言者の真の相続人であり、その子孫もアリーの子孫と同様に、信徒の共同体を導くために召し出されたと主張することができたのであった。

継承 *erfopvolging* という概念がアラブ人にとって常に異質なものであり、預言者がそれについて何の指示も残していないことを念頭に置けば、諸党派によって捏造された後代の伝承を考慮に入れるのでもない限り、このような議論の意義を理解することができる。もちろん、ファティマの

^{viii} Mukhtār の名は「心にとまる」または「重大である」を意味する語根 *kh-ṭ-r* から派生。

子孫はこうした議論に対して、少なくとも自分たちの血管には預言者の血が流れているという根拠を示すことができた。これに対して上記の逸話は、アッバース家がすでに当時から、いつか自分たちがこの問題の当事者になると考えていたことを示すものとして、言及されるに値する。

こうした信念に基づく不用意な発言により、彼らとウマイヤ家との友好関係は損なわれてしまったようだ。カリフのワリードは、アブドッラー・イブン・アッバースの息子であるアリーを二度にわたって鞭打ちにしたと言われている。最初の理由は、アブド・アル＝マリクに離縁された女性、アブドッラー・イブン・ジャアファル・イブン・アビー・ターリブの娘ルバーバと結婚したからであり、二度目の理由は、自分の子供たちに政権（カリフ位）が回って来ると主張したからである⁽¹⁶⁾。

アリーとその一族がシリア沙漠との境にあるフマイマに住み着くことになったのは、こうした関係悪化の結果であったに違いない。[17] アリーの父アブドッラーの奴隷の息子であったサリートという人物が、自分はアブドッラーの息子であると主張し、その遺産の分配を要求するという出来事があった。この問題を持ち込まれたカーディーは、恐らくカリフの要請により、彼の要求を認めた。その後、サリートは謎の死を遂げたが、アリーが無関係というわけではなかったであろう。サリートを非常に可愛がっていたワリードは、彼の死をアリーのせいにして紅海のダフラク島に追放したが、後にアラビアのアル＝ヒジュールに住むことを許した。スライマーンが権力を握ると、アリーはダマスクスに呼び戻されたものの、宮廷における以前の辛い経験から、シャラート地方のフマイマに落ち着くことを望んだ⁽¹⁷⁾。アッバース家はフマイマで、それまではプラトニックなものに過ぎなかった野心的な願望を成就させる最初の機会を得ることになる。

ムフタールの反乱が徹底的に鎮圧された後も、シーア派の思想は密かに広まり続けていた⁽¹⁸⁾。人々は、たとえシーア派の努力がなかなか実を結ばなかったとしても、あるいは呪うべき王朝がアリーの子孫をねじ伏せてきたとしても、「その時」が来れば、正義のイマームである「アル＝マフディー」が現れて、事態を取捨してくれると確信していた⁽¹⁹⁾。[18] そのイマームが誰であるのかについては、意見が分かれた。ある者はフサインの子孫であると考え、ある者はハサンの子孫、あるいはハナフィーヤ家の息子であると考えた。また、イマームは死後もメディナ近郊のラドワーの山中で「帰還」の時を待っており、アッラーが望み給えば義しく導かれし者として暴力と専制を打ち倒し、自らに忠実な者に勝利を与えると信じている人々もいた⁽²⁰⁾。

[アッバース家の] 運動全体がすでに組織化されていたという記録はなく、そうであったとも考えにくい。確かなのは、その指導者たちがアリー家の一部とかなり定期的に連絡を取り合っていたことだ。後者の中には、ムハンマド・イブン・アル＝ハナフィーヤの息子であるアブー・ハーシムもいた。ダマスクス出身のアブー・ハーシムは、98年にフマイマのアリー・[イブン・アブドッラー]の家族のもとに滞在し、到着して間もなく亡くなったと言われている。生前、彼はシーア派の要人との関係について彼らに情報を提供し、おそらく彼らのために推薦などもおこなっていた。

上記の話は、最終的に唯一妥当なものと思われる。ほとんどすべての歴史家が記しているところによると⁽²¹⁾、アブー・ハーシムはダマスクスから来る途中でスライマーン・イブン・アブド・アル＝マリクに毒を盛られてフマイマのアリーの家で死んだのであり、カリフ位が本来はアッバース

家のものであって、いつかは彼らの手に入るだろうという理由から、まず自分の権利をアッバース家(通常はムハンマド・イブン・アリーのみが言及される)に譲渡したのだという。[19]

スライマーンによる毒殺というのは非常に不自然であり、もしそれが行われたのだとすれば、むしろアッバース家の方こそ犯人なのではないかという指摘は正しい⁽²²⁾。さらに、アッバース家は自分たちこそ正当な権利を持っていると考えていたのであるから、権利の委譲などは問題外である。また、アブー・ハーシムが持っていたという権利についても、彼がファティマの子孫でない以上、その性質は疑わしいものである⁽²³⁾。現に、マンスールはアリー家のムハンマド・イブン・アブドッラーに宛てた書簡の中でカリフ位に関する自分の家系の権利を主張したとき、アブー・ハーシムについては全く言及していない。

しかし、こうした非現実性を根拠に、伝承全体を否定するのは行き過ぎである。アブー・ハーシムとアッバース家の間に本当に何かがあったとすれば、関係者は真実を公表しないように注意していただろうし、歴史家たちはアッバース家に近ければ近いほど、彼らにとって最も好ましい叙述だけを作品の中に取り入れたであろうからである。

曖昧な権利についてはともかくとして、アブー・ハーシムが何らかの便宜を図る力を持っていたことは、イブン・クタイバ⁽²⁴⁾が彼のことを「シーア派とコンタクトを取っていた重要人物」と呼んでいることや、アブー・ハーシムと合議をしたダーイー(宣伝員)からの書簡についてタバリーが言及していることなどからも分かる。ある作者によれば、彼はムハンマド・イブン・アリーをシーア派の指導者たちと接触させたと言われている⁽²⁵⁾。

アッバース家の最大の関心事は、もちろんシーア派の知己を得ることであった。[20] 彼らは、自分たちこそが正当な権利を持っているにもかかわらず、シーア派の関心が自分たちではなく、アリーの子孫に向いていることをよく知っていた。後に明らかになるように、ひとたびそのような紹介を受けることができれば、信頼できる人々を抜け目なく味方につけることは彼らにとって難しくないのであろう。そのためには、アブー・ハーシムのような人物の影響力が不可欠だった。どうやって彼らがそれを手に入れたのか、誰がその代償を払ったのか、それは私たちにとって永遠の謎である。

第一章 ダアワの始まり^{ix}

イマームのムハンマド・イブン・アリーは、次のように述べたと伝えられている。

「クーフアの地の人々はアリーとその息子たちのシーアである。バスラの人々はウスマーン派(彼らはかつてウスマーンに味方していたが、自分たちがアリーの敵ともムアーウィヤの味方とも宣言していない)で、そのスローガンは中立を保つことであり、『殺すアブドッラーよりも殺されるアブドッラーであれ』と言っている。メソポタミアの人々はハワーリジュ派であり、もはやその名に値しないアラブ人であって、ムスリムでありながら内心はキリスト教徒である。シリアの人々はム

^{ix} ダアワ (da'wah) とは「呼びかけ」を意味する語で、政治的・宗教的なプロパガンダを指す。アラビア語史料ではアッバース家の秘密地下運動もダアワと呼ばれている。

アーウィヤとウマイヤ家だけに従っており、時としてあらゆる善人の敵となる。メッカとメディナの人々はアブー・バクルとウマルのことしか考えていない。残るのはホラーサーンだけである。そこには勇敢で率直な気質の人々が多くおり、誰かに対する共感にも反感にも心を掴まれていない。彼らは力強く、活力に溢れ、声が大きく、その姿は見る者に恐怖を与える。」⁽²⁶⁾

この発言の信憑性はともかく、アッバース家が自分たちの運動のために必要な支援を求めようとした際 [22]、ホラーサーンに注目したという事実を説明するには非常に適したものである。

帝国の中心がメディナやダマスカスにある限り、ホラーサーンは西方で起きている出来事や思想、論争など多くの点について蚊帳の外であった。クーファ、バスラ、メディナのような町では、人々の関心事をめぐって、とりわけイマーム位を誰に帰属させるかという問題をめぐって白熱した議論が戦わされていたが、ホラーサーンの人々は、未征服の辺境の異教徒たちとの戦争にかかりきりであった。彼らとの戦いを通じてイスラム教への熱意は高まったものの、政治的・宗教的な問題に取り組む時間や機会はほとんどなかった。

トランスオクシアナでのトルコ人との戦いは、イランとトゥーラーンとの昔ながらの闘争であった。人口の稠密な地域が互いに遠く離れており、通商よりも農業が主体であったために民族の混淆が妨げられたことは、ペルシャ人に本来の勇敢さと素朴さを維持させた。逆にイラクでは、豊かな都市生活と他民族との頻繁な往来が、すでにその悪影響を露わにしていた。

アラブの支配者との関係は、帝国全体がそうであったように、必ずしも友好的なものではなかったようだ。両人種の間には、完全な平等はなかった。軍隊の中で、庇護民（マウラー、ペルシャ人のイスラム教への改宗者）はそれぞれの指揮官の下でバラバラに戦った。彼らの不平は、タバリーの伝承によく現れている。[23]

100年、当時のホラーサーン総督であるジャッラーフ・イブン・アブド・アッ＝ラフマーンは、二人のアラブ人と一人のマウラー（庇護民）から成る使節をウマル2世のもとに送った。二人のアラブ人は口上を述べ、マウラーは黙っていた。ウマルは、「汝も使節ではないのか」と尋ねた。「その通りです。」

「では、なぜ喋らないのか。」

「信徒の長よ、二万名のマウラーが俸給も手当も無いままに不信心者と戦っています。自分の信仰を捨ててムスリムになった多くの者が、いまだに人頭税を払わされております。我々の総督は粗野な党派主義者（‘açabijon gâfin）で、説教壇から『他部族の百人よりも自部族の一人を我輩は好む』と公言しています…。彼はまた、不正と暴力に従って行動するハッジャージュの剣です。」⁽²⁷⁾

このことから、不満の内容は支配者であるアラブ人カーストのマウラーに対する不当な扱いであったことがわかる⁽²⁸⁾。しかし、総督の粗暴さや自部族の称揚についても非難されているのは、特徴的である。というのも、ここでマウラーがカリフに向かって、おそらく柔らかな物言いで総督について語ったことは、多かれ少なかれすべてのアラブ人に当てはまるからだ。それは、名将クタイバ・イブン・ムスリムの下でマウラーを率い、クタイバが自分の同族に殺されるという悲劇を目撃した"ナバタイ人"ことハイヤーンという言葉にも通じるものがある。

「このアラブ人たちは、神のために戦っているのではない。互いに殺し合わせておけ。」⁽²⁹⁾

アラブ人の激しい部族間対立と打ち続く相互の争いは [24]、ベルシャ人には理解不能であり、両民族の完全なる協働を妨げていた。

ムハンマド・イブン・アリーという言葉から、ホラーサーンではクーファのようなアリーとその家族のための運動がまだ行われていなかったか、少なくともこのプロパガンダ (da'wa) の特定のメンバーのための運動はまだ行われていなかったと推測される。いずれにしても、この地方は遠隔地にあったことから、フサインの惨殺やムフタルの反乱などが起きるたびに新たな燃料を投下されたイラクとは異なり、アリー家に対する愛着が人々の心に深く刻まれることはなかった。

このことを強調しなければならないのは、ある後代の作者が逆に⁽³⁰⁾、この地方にはムハンマドの一家全般を宣伝するものと、前述のアブー・ハーシムを宣伝するものの二種類のダーイーがすでに散らばっていたと語っているからである。この記述は、アブー・ハーシムの伝説の導入部に置かれているために価値が高いものとは言い難く、他の史料によって確証が得られるまでは、最初の伝承に従う方が無難であると思われる。預言者の一族が概してホラーサーンでも賛美されていた可能はあり、ありえないことではない。いずれにしても、アッバース家が自分たちの目的のために利用しようとしたのは、この賛美であった。

彼らがホラーサーンに送り込んだ最初のダーイーたちは、預言者の一家の「望まれたる者 gewenschte」の支援者を募るように指示され、いかなる名前も出さないように命じられた⁽³¹⁾。この表現には、自分たちの主張にすべてのアリー家の主張を包含するという利点があり、それゆえに、彼らが設定した目標に向かってシーア派の運動全体をまとめるために最も有効なスローガンであった。[25] 時期が来たとき、つまり、運動を操るためのすべての糸を掌中に収め、獲得した支持者たちが後戻りできなくなったときに、アッバースの子孫の一人が望まれたる者として登場し、自分の家系の支配権を確保できるというわけである。

アッバース家のプロパガンダが始まった時期については、情報を伝えている者たちの中で意見が分かれている。タバリーは⁽³²⁾、ヒジュラ暦 100 年とする伝承を紹介している。それによると、この年にムハンマド・イブン・アリーがシャラートの地からイラクへ一人、ホラーサーンに三人の宣伝員 zendeling を送り、自分と自分の一家のために支持者を集めるよう命じた。彼らが送り返してきたリストの中から、ムハンマドは十二名の人物をナキーブ（頭目）に選び、さらに七十名を選んで、指導と助言のための文書を与えたという。

[タバリー所収 132 年のマダーイニーによる] 別の報告によると、アッバース家は三つのタイミング tijdstippen を待っていたという。「暴君ヤズィード・イブン・ムアウィヤの死 (83 年)、[ヒジュラ暦] 1 世紀の終焉、ヤズィード・イブン・アビー・ムスリム^x に対するアフリカでの反乱 (102 年)」である⁽³³⁾。しかし、[タバリー所収 130 年の] 他の記録では、最初のダーイーの派遣は 103 年か 104 年であったとされている⁽³⁴⁾。

^x イラク総督ハッジヤージュの乳兄弟で、イフリーキヤ総督だった 102 年に殺害された (Ṭabarī, II, 1435)。

ここで紹介した年代の中では、ヒジュラ暦 100 年というのが最も信頼性が低いように思える。その理由はこうである。

『比類なき首飾り』にオリジナルな形で収録されているハイサム・イブン・アディーの伝承を見ると⁽³⁵⁾、アブー・ハーシムがムハンマド・イブン・アリーにイマーム位を譲渡したという伝説について述べた箇所、アブー・ハーシムが死ぬ前にアッバース家に与えた実際的な指示の一つとして [26]、「ロバの年」が明けたらホラーサーンに使者を送るように、というものがあつたと書かれている。「ロバの年とは何だ？」とムハンマド・イブン・アリーは尋ねた。その答えはこうであつた。「預言者の時代から百年が過ぎる前に、必ずその支配は崩壊する。なぜなら、アッラーはこう言っている^{xi}。あるいは、壊された村の前を通りかかって、"いくらアッラーでも、死に絶えてしまったものを生きかえらせることができるだろうか"と言った男のように。そこでアッラーはその男を百年のあいだ死なせておいてから、再び立ち上がらせ、"汝はどのくらいの時間を経たか"と尋ねると、"ほんの一日か半日ほど"と答えた。そこで、アッラーは言った。"いや、汝は百年の時を経た。見よ、お前の食べ物も飲み物も腐つてはいないが、お前のロバはどうだ [=白骨になっている]。我らは、お前を他の人々への徴としよう。"⁽³⁶⁾」このコーランの箇所を引用し、解釈というよりはむしろ援用しているところを見ると、それに基づいた 100 年という年号は、アッバース家の運動がアッラーによって望まれ、定められたものであるかのように見せるため、はっきりと意図的に採用されたものであることがわかる。

上記の仮説を補強するのは、ナキーブ等の任命がこの年かその一年後に行われたことになっているという事実である。その時点ではまだ、必要な信頼できる支持者を獲得できていないはずがなく、そのようなことはありそうもない。さらに、ナキーブが史料に登場するのは総督アサド・イブン・アブドラーの二度目の任期、つまり彼らが任命されたとされる時期 [=100/718 年] の 17 年後だという理由も大きい⁽³⁷⁾。[27]

これに関連して注意しなければならないのは、アッバース家のダーイーたちが (102 年に総督のサイド・フザイナによって) ホラーサーンで逮捕されたと伝えられている [タバリーの] 最初の報告⁽³⁸⁾ に具体的な名前が出てこないにも関わらず、100 年の時点でダーイーの名前が出てくる史料があることである^{xii}。[ただし] それらは著者であるダイナワリーが当該の報告の中に勝手に挿入したものであり、それゆえ二人の人物に言及しているにもかかわらず、双数形を使わず複数形を残すという失態を犯してしまっている。⁽³⁹⁾ [28]

タバリーは 107 年になってから初めてダーイーの名前を出した報告を記しており、この年に彼らの何人かがアサド・イブン・アブドラーによって逮捕され、一人を除く全員が処刑されている⁽⁴⁰⁾。

次に挙げるべき題材は、[タバリー所収 109 年の記事にある] マダーイニーによる物語である⁽⁴¹⁾。

^{xi} 本稿におけるコーランの訳文はすべて井筒俊彦 (訳) 『コーラン』全 3 巻、岩波文庫、1964 年に従った。

^{xii} ダイナワリーが挙げているダーイーの名はアブー・イクリマとハイヤーン・アル＝アッタールであるが、前後の記述を読むと 101 年以降の出来事としか考えられず、なぜファン＝フローテンがこのように判断したのか不明である。

この話は、ダアワの始まりに関する上記の記述のすべてと矛盾するように見える。その内容は、ここで検討すべき範囲に限って簡単に言うと、以下の通りである。

アッバース家の最初の宣伝員は、アサドの一回目の統治期 [= 106 ~ 109年] にホラーサーンへやってきた。彼の名前はズィヤード・アブー・ムハンマド。彼は裏切られてアサドに引き渡され、最初の逮捕時には釈放されたものの、二度目の逮捕で死刑となる。

前述の通り、名前の分かっていてるダーイーの最初の派遣は、アサド・イブン・アブドッラーの一回目の統治期である107年にさかのぼる。ここで問題となるのは、「107年の報告は、ズィヤード・アブー・ムハンマドなる人物を認知しているのか」である。それは次のように語っている。

「この年、ブカイル・イブン・マーハーン（ムハンマドのイラクにおける代理人）は、アブー・イクリマことアブー・ムハンマド・アッ＝サーディク、ムハンマド・イブン・フナイス、アンマール・アル＝イバーディーを、アル・ワリード・アル＝アズラクの母方の叔父であるズィヤード⁽⁴²⁾を含む自分たちのシーアの何人かと一緒に、ダーイーとしてホラーサーンへ派遣した」云々。結末は、アサドがアンマールを除く彼らを磔にしたというものである。

つまり、ズィヤードなる人物とアブー・ムハンマドなる人物の両方が登場するわけだが、これでは疑問が払拭されない。この問題をより完全に解決するために、おそらくマクリーズイーのムカッファーから引用された [29]、*Mémoire sur l'avènement des Abbasides au khalifat*⁽⁴³⁾ 所収のクアトルメール^{xiii}による記述を見てみよう。

それによると、アブー・イクリマ・アッ＝サーディクは、本名をズィヤード・イブン・ディルハムといい、イマームによって、もしくはムハンマドのイラクでの代理人であるマイサラによって、ホラーサーンに派遣された。ホラーサーンに到着すると、名前をマーハーン・アブー・ムハンマドに変え、最後はアサドによって処刑されたという。

ここでは、私たちが問題としているアブー・イクリマ（アブー・ムハンマド）・アッ＝サーディクが、ズィヤード・イブン・ディルハムなる人物と同一視されている。一見、怪しい話ではあるが、最初の名前にクンヤしか入っていないことを考えると、十分に考えられることである。しかしこれで、私たちは最終的に、ズィヤード・アブー・ムハンマドをアブー・ムハンマド・アッ＝サーディク（ズィヤード・イブン・ディルハム）と同一視することができるようになった。

以上により、次のような結論が得られたようだ。ダアワがいつから始まったのかは定かではないが、最初のダーイーは102年に確認されており、アサドの一回目の統治期に初めて特定の人物が言及されている。この人物は、いくつかの伝承ではアブー・ムハンマドまたはアブー・イクリマというクンヤによってのみ知られている。ズィヤード・イブン・ディルハムという名前もヤアクービーによって伝えられているが、破損した形になっている⁽⁴⁴⁾。ヤアクービーによると、彼は、サイード・イブン・アブド・アル＝アズィーズ（フザイナ）が幾人かのダーイーを逮捕した後に活動しており、

^{xiii} クアトルメール Étienne Marc Quatremère (1782-1857) はフランスの東洋学者。ド＝サシー Silvestre de Sacy に師事し、セム語やペルシャ語の研究に業績がある。

先の私たちの仮説とは矛盾しない。ズィヤードの他に誰かいたのかどうかは、マダーイニー⁽⁴⁵⁾とヤアクービーの報告からは明らかでないが、タバリーの107年の記事からはそのように推測される。

[30] すでに見てきたように、最初のダーイーたちは政府側から疑いの目で見られていなかったわけではなく、時にはアッバース家運動に対する彼らの熱意が死をもって罰せられることもあったが、いくつかの状況が彼らの努力を後押ししてくれた。まず第一に、地方内の情勢不安が総督たちの注意をそらしてくれた。異教徒に対する人頭税と地租に関する規定を額面通りに実施しようとして失敗したため、サマルカンドを除くトランスオクシアナのすべての地域で棄教が起こった。プハラとソグドは異教の状態に戻り、ペルシャの有力者たち（ディフカーン）はムスリムに対抗するためトルコ人に支援を求めた。これらの地域で長期にわたる戦争を余儀なくされたアラブ人は、必ずしも優勢に戦いを進めることはできなかった。後の章で詳しく説明するが、ハーリス・イブン・スライジュという人物は、ウマイヤ朝の権威を覆して幾つかの重要な都市を征服し、州都メルヴを奪おうとさえした。

だが、これらの戦争とは別に、アラブ人の間の党派抗争も、ダアワにとって大きな利益となった。というのも、ウマイヤ朝を代表する総督たちが、本来あるべき中立的な立場を守ったとは到底言えなかったからである。それどころか、総督の属する部族には他部族に対する優位性が保証され、その優位性が無遠慮に活用された。その結果、痛い目にあわされた人々の方は、自分たちの番が回ってきたときに、復讐することをためらわなかった。ダアワの歴史は、アラブ人のこの悪しき傾向がウマイヤ朝の当局にとっていかに致命的であったかを示している。

117年は政府にとって大漁の年となった。アッバース家の多くのダーイーが逮捕され、ある者は殺され、ある者は手足を切断されて投獄された。[31] 後者の中には、リーダーのスライマーン・イブン・カスィールをはじめとする何人かのナキーブがいた。ホラーサーンの総督はアサド・イブン・アブドラーで、罪人を目の前に連れてこさせて、こう言った。「悪人どもよ、コーランに書いてあるではないか。過ぎたことは、アッラーもお赦し下さろう。だが（同じ過ちを）繰返す者は、アッラーのきつい報復を頂戴するであろうぞ。アッラーはその権勢がぎりなく、復讐の神におわします。[5:95]」スライマーンは答えた。「私は喋るべきですか、それとも黙っているべきですか。」「喋ってみよ。^{xiv}」「我々の状況は詩人が次のように言った如くです。《水ではない何か喉に詰まったら、誰もがするように私は水で流し込む⁽⁴⁶⁾》と。我々のことは分かっているはずですよ。彼らはサソリを捕まえるために貴方を送り込みました⁽⁴⁷⁾。我々は総督である貴方の部族の人間ですが、ムダル族は貴方の前で我々を誹謗中傷しました。我々がクタイバ・イブン・ムスリムの死に最大の貢献をしたからであり、いま彼らはその復讐を目論んでいるのです。」

この言葉によって、スライマーンはヤマン族とラビーア族のナキーブを解放してもらい、ムダル族の二人だけが代償を払うことになった。そのうちの一人、ムーサー・イブン・カアブはロバ用のくつわで歯を抜き落とされ、もう一人のラーヒズ・イブン・クライズは300回の鞭打ちを受けた⁽⁴⁸⁾。

^{xiv} アラビア語の原文は Bal takallam.

総督の部族感情に訴えることは無駄ではなかったというわけだが、このときアサドが運動の頭目たちを逃がしてしまったのは無責任な行為であり、結果として、憎むべきムダ族だけでなく、彼自身の部族にも悲惨な結果をもたらす日がやって来ることになる。[32]

こうして、アッバース家のプロパガンダは自由に発展し、組織化していくことができた。巡礼客⁽⁴⁹⁾や商人⁽⁵⁰⁾を装って、ダーイーたちは村から村へ、町から町へと地方中を旅して回った。ウマイヤ朝とその支配を悪しざまに非難しつつ、状況に応じてヤマン族の間に滞在したり、ムダ族に加わったりして⁽⁵¹⁾、彼らはみな、異端の王朝であるウマイヤ朝の圧政が預言者の一家を抑圧していることを訴えた⁽⁵²⁾。そして野蛮な部族間の争いやベルシャ民族に対する不当な扱いを糾弾し、最終的には、預言者の一家から出たイマームの就任によってのみ救いがあると主張し、より具体的にはそれがムハンマド・イブン・アリーであると説いた。これによって、かつて大地を正義で満たすために帰還することが期待されていたハナフィーヤの息子 [=アブー・ハーシム] がしたことを、過激主義者たちも理解できるようになったのである⁽⁵³⁾。

第二章 ヒダーシュ

アッバース家のプロパガンダが最初の数年間にどのように組織されたかについて、歴史家はあまり多くを語っていない。彼らの乏しい情報から結論づけられるのは、ホラーサーンのダアワが、クーファにおけるムハンマド・イブン・アリーの代理人に部分的に依存していたということである。ファーティマ朝時代のダーイーの長によく似たこれらの代理人の最初の人物は、マイサラ・アブー・ラバフ⁽⁵⁴⁾であり、彼はアブー・ハーシムの仲介によってアッバース家と接触したと考えられる⁽⁵⁵⁾。

彼の後を継いだのはブカイル・イブン・マーハーンという人物で、105年にマイサラをはじめとするアッバース家の支持者たちとクーファで接触した。ブカイルは、もともとスィンド総督ジュナイド・イブン・アブド・アッ＝ラフマーンの秘書をしていたという。彼はクーファを訪れるにあたって、煉瓦ほどの大きさの金塊を一つと、銀塊を四つ持ってきた⁽⁵⁶⁾。そのため、彼の加入は運動にとって大きな財産となった。[34]

ムハンマド・イブン・アリーは、後にムハンマド家の宰相という称号を受け、イマームの個人的な相談役となるこのイラクのダーイー長と連絡を取り合いながら、ホラーサーンでプロパガンダを行う宣伝員を選んだ。ただし、ナキーブたちがダアワを監督し、ダーイー長の仕事の多くを引き継ぐことができるようになると、彼らはかなり独立した立場になったようである。彼らはイマームと個人的に連絡を取るようになり、その中から最も信頼できるアッバース家の支持者たちが生まれてくる様子については、後に見ることになるだろう。

さて、ナキーブ職の設立後にイラクから派遣されたダーイーたちは、単なる宣伝員ではなく、ナキーブとともにダアワを監督するように指示され、おそらくはイマームの名のもとにナキーブよりも上位の権力を行使していた可能性が高い。このようにして、彼らはホラーサーンのシーアとイラクの代理人との絆を強めていったのである。ヤアクービーやマダーイニーのような作者が⁽⁵⁷⁾ 派遣されたダーイーの一人にしか言及していないことから、タバリーで複数の人物が言及されている場

合、それは不正確であるか、あるいは他で言及されていない者は従属的な役割しか果たしていなかったと推測することができる。

ここで言及されているダーイーたちの最初の人物は、前述のズィヤード・アブー・ムハンマド（アブー・イクリマ・アッ＝サーディクとも呼ばれる）であろう。彼の後継者は、マダーイニーによってカスィールと呼ばれている⁽⁵⁸⁾。彼はヤアクービーにも登場するが⁽⁵⁹⁾、そこでは彼の名前が正しい形で提示されていない。それによると、ズィヤード・イブン・ディルハムに関する記述のあとで最初に出てくるダアワ関連の報告の中に [35]、「スライマーン・イブン・カスィール・アル＝フザーイーは、111年にホラーサーンで彼の仲間とともに活動し、ハーシム家のためのプロパガンダをおこなった」と書かれている。

このスライマーン・イブン・カスィールがマダーイニーのカスィールと同じ人物であることは疑いの余地がないが、マダーイニーの方が正しい名前を述べている可能性は非常に高い。なぜなら、ヤアクービーのような作者が[カスィールを]有名なナキーブであるスライマーン・イブン・カスィールと混同したというのは十分に考えられることであり、逆にマダーイニーがナキーブの名前を間違えてカスィールにしてしまったということは考えにくいからである。前述のクアトルメールの伝承で⁽⁶⁰⁾、このダーイーがアブー・ハサン・カスィール・イブン・サアドと呼ばれていることから、後者の可能性は全くありえない。

以上のことから、アッバース家の試みが成功するかどうかは、ナキーブと、イラクから派遣されたダーイーとの、双方の態度にかかっていたことは明らかである。もし、彼らが別の運動に取り込まれ、イマームに敵対するようなことがあれば、それまでに行ってきたことはすべて水の泡となってしまったであろう。単なる事実だけを伝えている報告から、その背後にあるものの本質や意味を見極めることは非常に難しいが、カスィールの派遣から間もなく、ホラーサーンのダアワはそうした危険にさらされたようである。

ただし、この問題に関する伝承は非常に異同が大きい。タバリーにある伝承者不明の報告には⁽⁶¹⁾、次のように書かれている。118年、ブカイル・イブン・マーハーンは、アッバース家のシーアの指導者として、アンマール・イブン・ヤズィードをホラーサーンに派遣した。メルヴに到着すると、彼は名前を変えてヒダーシュと名乗った。ヒダーシュはムハンマド・イブン・アリーのためのプロパガンダをおこない [36]、人々はたちまち彼に従うようになった。しかしその後、彼は態度を一変させ、でまかせを説き、ホッラム教の思想を公に示すようになった。なかでもヒダーシュは、女性の共有を認め、これらすべてがムハンマド・イブン・アリーの名の下に行われているかのように見せかけた。これを聞いたホラーサーン総督のアサドは、彼を引き立てて尋問した。ヒダーシュは猛烈に抗弁したが、アサドの命令で手と舌を切られ、両目をえぐられた。

一方、マダーイニーは⁽⁶²⁾、カスィールが一年ないし二年ほど活動していたときにハッダーシュ（ヒダーシュ）がやって来て、文盲であることを理由にカスィールを排除したと伝えている。彼の本名はウマーラ（アンマール）であったが、信仰を破り捨てた（ハダシャ）ので、ハッダーシュと呼ばれたのだという。マダーイニーはズィヤード・アブー・ムハンマドの死を109年としているような

ので、カスィールの活動は110年、あるいは（ヤアクービーによれば）111年の可能性もあり、この報告の中のハッダーシュは、タバリーの伝承者不明の報告より少なくとも七年は早く登場していることになる。マダーイニーは、ヒダーシュがアッパース家によって派遣されたとは言っていないが、前述のクアトルメールの伝承から⁽⁶³⁾、それが事実であることは明らかである。ここでは、カスィールの代わりにアンマール・イブン・イェズダードが選ばれ、ハッダーシュ・イブン・ヤズィードを名乗ったと書かれている。このアンマールはヒーラ出身の陶工で、キリスト教徒から表面的にムスリムになった後^{xv}、クーフアで教師（mo'allim）をしていたと言われている。

さて、タバリーの伝承者不明の報告の中で、ヒダーシュの派遣、転向、死亡がすべて一年間のうちに起こったというのは驚きである。[37] 従って、マダーイニー（クアトルメール）の記述を選ぶ方が良さそうに思えるが、ヒダーシュがもっと早い段階で派遣された可能性を示唆する別の報告もある。107年と108年の記事で、タバリーはこれに関連する二つの伝承を挙げている。

一つ目はすでに挙げたもので、アサドがアブー・イクリマ・アッ＝サーディクらを処刑し、アンマール・アル＝イバーディーだけが難を逃れたというものである。二つ目は⁽⁶⁴⁾、何人かのダーイーが派遣されてアサドに逮捕された経緯を描いており、そのうちアンマールだけが殺されて、やはり他の者は解放されている。すでにイブン・アル＝アスィールは⁽⁶⁵⁾、二つ目が一つ目の伝承を逆の形で繰り返しているだけであり、両方とも同じものだと考えていた。部分的に、彼のこの考えは正しいようである。すでに指摘した通り⁽⁶⁶⁾、アブー・イクリマ・アッ＝サーディクに加えて言及されている人々は、従属的な役割を果たしていたか、さもなければその場にはいなかったと考えられる。後者は、一つ目の伝承におけるアンマールのケースで間違いない。私が思うに、アンマールが殺されたという説と、アンマールが解放されたという説の、二つの見解が存在するようである。殺されたという説は108年の記事に初めて言及されており、解放されたという説はアブー・イクリマ・アッ＝サーディクの話に付け加えられている。最初の伝承に従えば、アンマールはアブー・イクリマの後継者だったようにも取れるが、これは前述の通りカスィールに言及しているヤアクービーやマダーイニーの記述と矛盾する。そうすると、アンマールはカスィールの後で初めて派遣されたと考えべきであるが[38]、そうすると、このアンマールは、同じくアンマールと呼ばれていたヒダーシュとは明らかに同一人物ではないということになる。新しい情報が出てくれば、108年～113年の異同を解消して確実なことを言えるようになるであろうが、いずれにせよ、ヒダーシュが118年に初めて登場したという説には異論の余地があるのである。

ヒダーシュの行動がダアワにとってどのような意味を持ったのかを説明する前に、その結末について知っておく必要がある。タバリーはこれについて120年の記事で言及している。

a. ムハンマド・イブン・アリーは、ホラーサーンにおける彼のシーアがヒダーシュに従っていることに不満を持ち、彼らと一切の関係を断った。シーアの人々がイマームの思惑を知るためにスライマー

^{xv} 原文には van christen moslim geworden としか書いていないが、Quatremère, p.334 に "et chrétien de religion, mais qui, ayant embrassé l'islamisme, au moins en apparence" とあるのでこれに従う。

ン・イブン・カスィールを送ると、イマームはバスマラしか書かれていない手紙をスライマーンに託した。彼らはそれによってヒダーシュの教えがイマームから出たものでないことを知り、悲しんだ。

b. スライマーンが去った後、ムハンマド・イブン・アリーはブカイル・イブン・マーハーンに手紙を送り、ヒダーシュは異端者 *dwaalleeraar* であると伝えた。だが、人々はブカイルを軽んじ、彼に信を置かなかった。次に、ブカイルはイマームから真鍮や鉄の杖を何本も渡された。彼は再びホラーサーンを訪れて杖を配り、彼らがイマームの意図に反する行為をしたことを悟らせ、悔い改めて改心させた⁽⁶⁷⁾。

aとbの二つの報告が互いに両立しないことはすぐに分かる。もし、スライマーン・イブン・カスィールの持ち帰った最初の手紙が前述のような効果をもたらしたのであれば [39]、ブカイル・イブン・マーハーンを派遣したことも、彼が邪険に扱われたことなども、説明がつかない。それゆえに私は、これらが同じ出来事に関する二通りの解釈なのだと確信している。この二つはどちらもシンボルに関わる話で終わっている。ムハンマドは、それを用いて迷える家畜の群れを自らのもとへ連れ戻したのであり、下線を引いた文言が二つの話を結びつける役割を果たしていると考えられる。第一の説によれば、イマームが腹を立て、シーアが反省して和解を求めているのに対し、第二の説によれば、シーアがイマームから離反し、イマームは彼らを自分の下に連れ戻すことに苦勞している。私の考えでは、二つ目の説の方が事実に近い、一つ目の説は事の真実を隠蔽しようとするアッバース朝側の歪曲された報告であることは明らかである。

それでは、これらヒダーシュのホッラム教的な思想とは、どのような内容を持っていたのだろうか？ ホッラム教徒 Chorrami という名前は、ホッラム教の教義に傾倒している者のことだが、これはペルシャ語のホッラム *churram* という語に由来しているようである。ホッラムとは、「良い」「心地よい」という意味で、アラブ人の間では、イマームを崇拝し、法で定められた宗教上の義務について非常に自由な考えを持ち、これを重んじず、自分たちにとって「心地よい」ことを行うシーア派の一派を総称する言葉として使われている⁽⁶⁸⁾。このような考え方の基礎は、すでにカイサーンの支持者によって築かれていた。カイサーンは、宗教が「一個人への服従」⁽⁶⁹⁾、つまり服従される権利を持つ人物、神の一部が乗り移ったイマームへの服従であると説いた。これは [40]、イブン・アル＝アスィールがヒダーシュについて述べていることと一致する⁽⁷⁰⁾。「断食 [の義務] は存在しない。礼拝も、大巡礼もない。[おこなうべき] 断食というのは、イマームの名前を口に出して言わないようにすることである。同様に、礼拝とはイマームに対する祈りであり、大巡礼とはイマームのもとへ赴くことである。」コーランの「信じて善い行いをする者は、何を食べても罪はない⁽⁷¹⁾」という言葉は、元来は禁忌でない動物を食用することを許可するだけのものであるが、これがすべての快樂に対して適用された⁽⁷²⁾。信仰がイマームへの服従を中心としたものであったので、これらの快樂は非常に広範囲に拡大され、例えば女性の共有なども含まれていた。

ヒダーシュは、これらすべてをムハンマド・イブン・アリーの名の下に説いたと言われているが、これはありえないことではない。アッバース朝や後代のファーティマ朝が、このような教えを通じて支持者を獲得しようとしていたことは、十分に考えられる。しかし、それは組織内の者をより強

固に縛るためのものであり、大衆の間で公然と宣言されたものではなかった。

シーア全体にどの程度火がついたのかは不明であり、ヒダーシュが自分の考えをダアワの頭目であるナキーブと七十人の古株にしか伝えなかった可能性もあるが、彼らの間に多くの支持者を得たことは確かだ⁽⁷³⁾。しかし、ここに一つの問題が未解決のまま残っている。[41] それは、シーアがなぜイマームとの交流を断ったのかということであり、ブカイルが歓迎を受けずに追い返された理由もそこにあるに違いない。

その理由は次のように考えられる。ヒダーシュの教義は、全面的にイマームへの服従に基づいていたが、それゆえに、そのイマームが真のイマームであり、そのイマーム位の権利に議論の余地がない場合にのみ効力を持つことができた。これが、アッパース家の場合には全くそうでなかったことは、ここであらためて説明するまでもないだろう。そのため、ホラーサーンではナキーブや頭目たちが^{xvi}、自分たちのイマームであるムハンマド・イブン・アリーがアッラーの望む人物であるかどうかを疑い始め、これが自然に、イラクのダーイー長とホラーサーンのシーアとの間に分裂をもたらしたのである。この点についてもヒダーシュが悪玉であったことは、マダーイニーの伝承で⁽⁷⁴⁾、アサドがヒダーシュの手足を切断した際に「神に讃えあれ。アブー・バクルとウマルのために、貴様に復讐する御方に」と言葉をかけていることから推測できる。つまり、ヒダーシュは初期のカリフたちを認めようとせず、アリーからカリフ位を奪ったことを理由に彼らを侮辱していたのではないかと考えられるのである。そうなると、彼はカリフ位を持つ正統性がアリーの子孫のみにあると考え、その意見をダアワの頭目たちに伝えていたということはある。しかし、彼らはまだ彼と完全に打ち解けていたわけではなく、少なくとも内部的にはイマームとの絆が残っていたようだ。[42] ムハンマドが鉄と（黄）銅を嵌めた杖を送ると、彼らは自分たちの過ちに気づく。この杖は、彼のイマーム位の権利を知らしめるためのシンボルであったとしか思えない。それは、人々がイマームの言葉を信じられなくなったときの最後の頼みの綱であり、シーアはそれに服したのであった。このシンボルに関して重要なのは、『泉の書 Kitab al Ojun』⁽⁷⁵⁾の著者が、アブー・ハーシムがアッパース家に渡した徴（alamāt、シンボル）とシグネット・リングについて語っていることである。また、ヤアクービーは⁽⁷⁶⁾アリー家がムハンマド・イブン・アリーに与えた徴 het teeken についてはっきりと言及しており、それはここで言われている杖であった可能性もある。

ヒダーシュがその悪辣な傾向によってアッパース家の企図を台無しにしかけた後、イラクからホラーサーンに送られるダーイーはいなくなったようであり、少なくともその名前は我々に伝えられていない。ホラーサーンでのプロパガンダに関する一切のことは、ナキーブたちの長であるスライマーン・イブン・カスィール⁽⁷⁷⁾の監督下に置かれたが、彼もまた、より強力な人物に道を譲らなければならなくなった。その強力な人物というのが、ダアワの立役者、アブー・ムスリムである。しかし、彼の活動を取り上げる前に、その背景となった幾つかの出来事を見ておく必要があるだろう。

[(2) につづく。全5回で完結予定]

^{xvi} ファン＝フローテンは25頁で12名のナキーブを「頭目 (hoofden)」と表現しているが、ここではダアワの指導層を漠然と指しているようである。